

令和7年度 南アルプス市立大明小学校 学校関係者評価書

南アルプス市立大明小学校 学校関係者評価委員会

- 1 評価実施日 令和8年1月15日(木) 学校関係者評価委員会を開催して実施
- 2 評価の方法 学校が作成した自己評価書をもとに学校関係者評価委員が対談を行い、そこで出された意見を集約して「学校関係者評価書」を作成した。
- 3 評価者 学校関係者評価委員
佐藤良子 長田良子 市川和男 高野晃史 一瀬 覚 金丸広人
自己評価書作成
大久保 学(校長) 矢崎恭央(教頭)

4 学校関係者評価

(1) 教職員アンケートについて

○学校経営・組織運営

- ・教職員全員が「目指すべき姿」を共有し、同じ目標を持って活動している点は非常に素晴らしい。
- ・先生方の自己評価を尊重すべきであり、他校と比較するだけでなく自信を持って取り組んでほしい。
- ・多様な勤務形態の職員がいる中での情報共有や報告・連絡・調整にはまだ課題があるため、改善を継続してほしい。
- ・先生が困ったときに最善(あるいはベター)な解決策を助言できるアドバイス体制が必要である。組織として守る姿勢が重要である。

○児童アンケートの結果分析と対応

- ・3・6年生は学校が楽しいと答えている一方で、4年生には「行きたくない」と答える児童がいる。この相反する回答に対する事後の調査や対応状況を確認したい。
- ・人間関係の深化: 学校が楽しい理由の多くが「友達関係」である。この良好な関係をさらに伸ばすための具体的な施策を検討してほしい。
- ・3・4年生では相談相手として「先生」を挙げる子もいる。年代による理由があるのか検討が必要だが、体制整備は不可欠である。

○学習指導・ICT・読書活動

- ・教員の習熟度に二極化が見られ、「深い学び」への活用には至っていない面がある。ICT を牽引するリーダーの配置と研修の充実が必要である。
- ・ICT 導入が進む一方でマニュアル(手作業)の教育が薄れることを心配する意見もあり、バランスの良い学習の場を検討してほしい。
- ・読書活動は課題である。スモールステップでの指導体制を構築し、想像力や豊かな心を育てほしい。

- ・昨年度に比べ、教職員が意識的に取り組んだことで児童の道徳的実践力や道徳性が高まっており、大きな成果である。

○小中連携・一貫教育

- ・小学校・中学校の教員が互いの授業を見合い、児童・生徒の成長の過程を肌で感じることは、教員の学びのために非常に重要である。多忙な中だが時間を生み出して継続してほしい。
- ・中一ギャップが改善され、問題が解消されるよう一歩ずつ進んでいくことを期待する。
- ・南アルプス市の中の「甲西の子」としての意識付けも大切だが、さらに「世界に羽ばたける子」を育てるといった広い視点を持ってほしい。

(2) 保護者アンケートについて

○学校運営・総評

- ・大多数の保護者が教育活動に理解を示し、肯定的回答をしていることは、教職員の日々の努力の賜物であり、感謝している。学校からの文書や連絡等は「正確・迅速・丁寧」であり、これらを通して学校の地道な取り組みを評価していると感じられる。
- ・アンケートは概ね肯定的だが、その裏にある苦労をどのように解消・クリアしているのかが気になる。「先生の対応」について賛否あるが、すべてを解消するのは無理でも、改善の余地があるものは健闘・検討を望む。

○教職員体制について

- ・意見にある「担任不在」という言葉が気にかかる。一時的か、長期的なものか、すぐに解消できないのか懸念している。日々の指導体制や、現場の先生方・児童の負担を心配している。来年度には解消されることを切に願う。

○学習指導・ICT 利活用について

- ・「PC だと漢字変換が簡単すぎる」という意見に同感である。紙に書くことで覚え、考える力が身につくのではないか。
- ・ICT 機器やタブレット端末が、本当に学力向上に効果的なのか疑問視する声があることも留意すべき。
- ・保護者からは学習指導が見えにくい側面がある、特に「家庭学習」の定着には課題を感じる。校内研修の柱として取り組む必要性に賛同する。

○生活習慣・安全対策について

- ・朝食摂取については、児童アンケート等で正確な実態把握が必要ではないか。携帯電話のルール作りは、防犯の観点からも保護者と連携した取り組みや啓蒙活動が必要である。
- ・不審者対策への懸念意見に対し、具体的な方策をお願いしたい。事件や災害は予期せぬ時に起こるため、気を引き締める機会としたい。
- ・小中一貫教育実施 3 年目にしては、保護者の関心・理解が低い。具体的な活動について、機会があるごとに工夫した発信を継続してほしい。

(3) 児童アンケートについて

○学校生活の楽しさと登校意欲について

- ・90%を超える児童が「学校が楽しい」と回答していることは、教職員・児童・保護者の間に良い人間関係ができている証拠であり、非常に喜ばしい。
- ・3・6年生は肯定的だが、4年生で「学校に行きたくない」という回答が見られる。この相反する回答について、その後の追跡調査やケアが必要ではないか。
- ・「楽しくない」理由として「勉強が分からない」「友達関係」が挙げられているのが気になりである。
- ・5年生の「学習が分からない」＝「楽しくない」という図式が明確であり、逆に言えば学習支援での対応がしやすいのではないか。
- ・「家でやりたいことがある」という回答が比較的多いが、具体的にどのような内容なのか(ゲーム等なのか、その他なのか)気になる。

○友人関係・相談体制について

- ・「学校が楽しい」理由の多くが「友達関係」にある。この良さをさらに伸ばす施策を検討してほしい。
- ・3・4年生では相談相手に「先生」を挙げる児童もいる。これは良い傾向であり、その信頼に応える体制整備が必要だと思う。
- ・低学年で「困ったときに相談する人がいない」という割合が多い。道徳や生徒指導の時間を通じて、「誰に相談したらよいか」を具体的に提示・指導する必要がある。

○携帯電話・生活習慣について

- ・児童の携帯電話所持率が高く(特に保護者の認識とのズレも含め)、驚いている。
- ・基本は家庭のルールであるが、トラブル防止のため、学校としても扱いの方針やルールを提示したり、啓蒙活動を行ったりする必要があるのではないか。

○学校運営・行事・その他

- ・様々な教科に対し、覚えたり考えたりと「根気よく取り組む」姿勢の大切さも伝えていきたい。
- ・学校は「楽しい」だけでなく、我慢や緊張、ダルさなど多様な感情が入り混じる場であるという側面も理解している。

作成責任者 大明小学校関係者評価委員会
評価書作成事務 大明小教頭 矢崎恭央